

鹿児島県十島村宝島大池遺跡 A地点出土のオオツタノハについて

Notes on *Scutellastra optima* Excavated from Oike Site A in Takarajima Island,
Toshima Mura, Kagoshima Pref.

KUROZUMI Taiji

黒住耐二

I 調査の経緯と目的

大池遺跡は、トカラ列島南部の宝島に存在する縄文時代前期後葉から中期前葉(貝塚時代前2期)の遺跡であり、数度の発掘調査が行われてきた。特に、1993年と1994年に国立歴史民俗博物館(以下「歴博」と表記)では、A・B・Cの3地点において詳細な発掘調査が行われた[宝島大池遺跡発掘調査班1995, 1997]。この調査では、生活跡であるA地点では製品としての貝輪とともに自然遺物中にオオツタノハが多数含まれていることと、B地点の埋葬人骨に3個のオオツタノハ貝輪が装着されていたことが報告されている。

オオツタノハは、縄文時代から古墳時代まで貝輪の素材として選択的に利用された種である。トカラ列島はその中心的な分布域であり、遺跡出土個体の供給地だと考えられていた[黒住1994]。

ここでは、歴博の大池遺跡A地点の報告においてオオツタノハを中心とする貝類に関して述べる。

II 検討資料と観察方法

歴博の2回の調査で表採品や破片を含めオオツタノハと同定されていた資料および未同定であったカサガイ類資料は、全点注記され、一部の資料に関しては計測・観察が行われていた。筆者は、確認されていた全点を対象に種の再同定をおこない、残存部位(完形・殻頂部・破片等)・明瞭な加工の有無・焼けているかどうか等をチェックした。この時に一部の資料に関しては、写真撮影を行い、その写真から殻長を推定した。計測時には、殻最大長の一端が残っている場合には、推定殻長も求めた。

III 結果

1. 出土カサガイ類の種組成

歴博調査で取り上げられていたカサガイ類の組成を、同じトカラ列島の諏訪之瀬島でオオツタノハが極めて優占する近現代土坑の貝類遺体[黒住2019]とともに示した(表1)。数値は、破片数等

表1 大池遺跡A地点と諏訪之瀬島の近現代土坑から得られたカサガイ類の組成

	宝島・大池遺跡 A 地点	諏訪之瀬島 (近現代土坑)
	本報告	黒住 [2019]
ツタノハ科 Patellidae		
オオツタノハ <i>Scutellastra optima</i>	243	186
ツタノハ <i>Scutellastra flexuosa</i>	2	
ヨメガカサ科 Nacellidae		
オオベッコウガサ <i>Cellana testudinaria</i>	9	
“アミガサガイ” “ <i>Cellana stearnsii</i> ” ⁽¹⁾	21	33
ヨメガカサ <i>Cellana toreuma</i>	29	2
合計	304	221

を含まない最小個体数 (MNI: Minimum Number of Individuals) で示してある。

大池遺跡 A 地点では、304 個体のカサガイ類が出土しており、そのうちの約 80% をオオツタノハが占めており、ヨメガカサ・“アミガサガイ”⁽¹⁾ が続き、オオベッコウガサは少なく、ツタノハは極めて稀であった。出土個体のサイズ (殻長) では、ツタノハが 3 cm、ヨメガカサが 4 cm、“アミガサガイ” とオオベッコウガサが 5 cm 以上の個体であった。オオツタノハに関しては、後述する。

諏訪之瀬島の組成も、オオツタノハが 84%、“アミガサガイ” が 15% であり、オオツタノハが極めて優占する類似した組成であった。ただ、オオベッコウガサとツタノハは含まれていなかった。なお多くの図鑑等では、オオベッコウガサの分布は奄美以南となっているが、トカラ列島でも中之島でも潮間帯で確認されている [Kurozumi1994]。

またこれとは別に、大池遺跡 B 地点において、殻頂部が欠損しているオオベッコウガサの 8 cm の大型個体が単独で発掘されている。出土位置は、オオツタノハ貝輪着装人骨を伴う石棺墓と 3 m はなれており、埋葬とは無関係とされる [春成ほか 2021]。

2. 大池遺跡出土オオツタノハの出土部位等

大池遺跡 A 地点の歴博発掘調査では、出土状況が不明なものを含めて、同定標本数 (NISP: Number of Identified Specimens) として 381 点のオオツタノハが発掘されている。今後詳細な破片等の接合等により、点数は増減するであろうが、製品を含めた 1 遺跡から 400 点近いオオツタノハの確認は先史時代遺跡としては最多例であることには間違いがないであろう。

この A 地点は、縄文時代前期末～中期前葉の下層と、同中期前葉～後半の上層に分かれる可能性が指摘されている [木下ほか 2022]。上下の層位はおよそ発掘グリッドで異なっており、今回は表採資料も得られたグリッドに従って、上下層に当てはめ、上下層での出土部位等の状況を比較した (表 2)。なお、時代は異なるが、最初の発掘時から知られていた人骨着装貝輪も表に組み込んでおいた。

同定標本数では、下層が上層の 4 倍と極めて多かった。これは、N10 グリッドからの多い出土に

表2 大池遺跡から発掘されたオオツタノハの詳細

考古年代*	A 地点		B 地点
	縄文前期末～中期前葉	縄文中期前葉～中期後半	縄文晩期
	貝塚時代前 2 期		
較正年代*	3400-3100 cal BC	3300-2700 cal BC	1370-1125 cal BC
	NISP=285	NISP = 72	人骨着装 NISP (MNI) = 3
完形	138 (17b)	28 (1b)	
殻頂部	47 (5b)	15 (1A, 1B, 1b)	
貝輪状	21	6	3
殻縁部破片 (貝輪状破片含む)	87 (6A, 4B)	20 (1A, 1B)	

* 木下ほか [2020, 2022] A : 製品, B : 焼け, b : 割れ。
凡例 : 10 (1A, 5b) は 10 点内に, A が 1 点, b が 5 点含まれることを示す

起因している。完形個体の割合(下層 : 48 %, 上層 : 38 %)と貝輪状の資料に対する殻頂部の割合(下層 : 2.24 倍, 上層 : 2.50 倍)は上下の層で大きくは異ならないようであった(表 2 の完形と殻頂部の数値による)。殻縁部破片(貝輪の破片もこの類型に含まれる)に占める表面が強く研磨されている確実な貝輪破片(表 2 で A で示した)の割合は下層で 0.5 %, 上層で 5 % であった。ただ, 上層では 1 点のみの確認であり, この割合を大きな差とはみなせないようである。

貝輪状の資料も比較的多く出土しているものの, 必ずしも強い研磨が施されているわけでない資料や, 整理作業中等に生じたと想定される殻頂部と殻縁部の分離している例が存在することから, 大池遺跡 A 地点の貝輪出土数の確定には注意が必要と思われる。

しかし, 前述のように, 殻頂部の点数は, 貝輪状のもの 2 倍以上存在している。オオツタノハ貝輪の製作に関して, これまでも, 最初に殻頂部の打ち抜き工程の存在が知られている[例えば忍澤 2001]。このことは, かなり多くの貝輪が製作された証拠と捉えることも可能である。殻の 1/2 以上が割れているものの割合(表 2 の b)は, 完形で 1 割程度であり, 逆に殻頂部で割れているものも多かった。殻頂部の破損個体ともに貝輪製作時に生じたことと考えられるかもしれない。

また, 僅かながら, 貝輪とは別な意識のもとに殻に穿孔されたと考えられる 1 点や, 打ち抜いた殻頂部を研磨したもの 1 点も認められ⁽²⁾, 貝輪以外の加工も存在していたことも指摘できる。一方で, 貝製品が焼けていることも先史時代には時に認められる事象であるが, 今回のオオツタノハで焼けて資料の割合は低く(下層 : 1.4 %, 上層 : 2.7 %), 殻縁部破片で製品とみなしたものの(表 2 の A)中に, 焼けているもの(表 2 の B)は存在しなかった。

なお, 本遺跡のオオツタノハ貝輪に関しては, 木下(本誌収録の報告)によってコメントされている。

3. 大池遺跡下層出土個体の殻長組成

欠損や破損のある個体の推定値を含めて, 下層から出土したオオツタノハの殻長組成を図 1 に示した。最小個体は 32 mm, 最大個体は 93 mm であった。50 mm 未満と 90 mm 以上の個体は極め

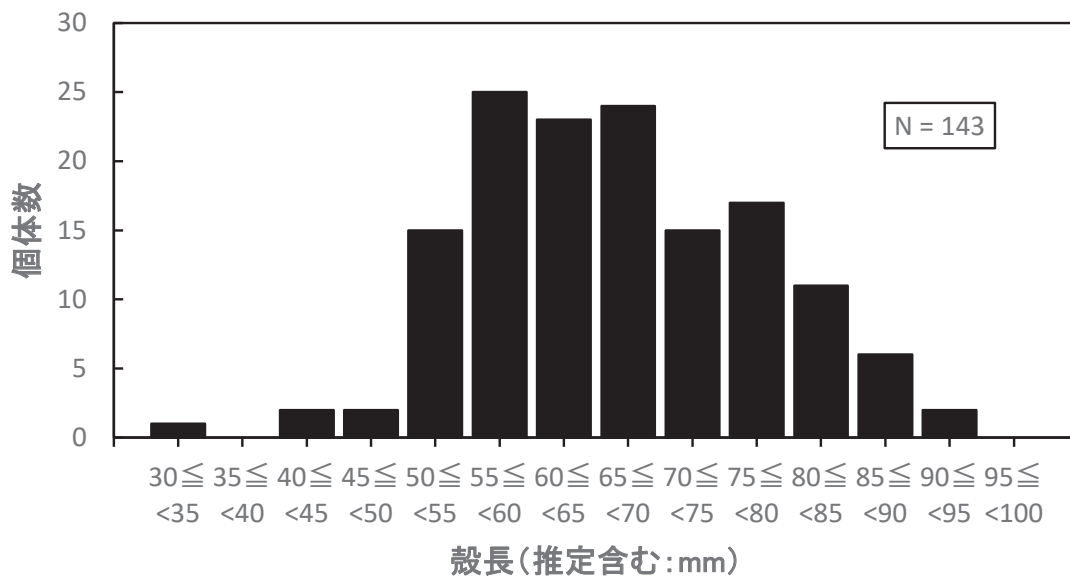


図1 大池遺跡下層から出土したオオツタノハの殻長組成

て少なく、およそ 50 mm ~ 90 mm の個体で占められていた。その中でも、55 mm ~ 70 mm の割合が高く、75 mm ~ 80 mm にもピークが存在するようにも見える。

この殻長組成から、採集は 5 cm を目安に、それ以上の個体を対象にしていたことがわかった。

IV 考察

1. 貝類採集の中でのオオツタノハの位置づけ

大池遺跡から出土したカサガイ類では、オオツタノハが極めて多く、近現代のオオツタノハ廃棄土坑と類似した組成であったことを示した(表1)。歴博による A 地点の発掘では、オオツタノハなどのカサガイ類・ヤコウガイ・チョウセンサザエ・マガキガイ等の腹足類(巻貝類)やシャコガイ類(二枚貝類)の多いことが記されている[宝島大池遺跡発掘調査班 1997]。今回の確認で、カサガイ類の最小個体数で 304 個体であった(表1)。整理中の大池遺跡 A 地点における貝類資料の同定標本数は、ヤコウガイ殻 383、同フタ 293、シャコガイ類 115、チョウセンサザエ(フタ) 87、マガキガイ 72 となっており、A 地点全体のオオツタノハ同定標本数は 381 であることから、大池遺跡 A 地点の先史人がかなり選択的にオオツタノハを採集していたことは明確である。

オオツタノハのトカラ列島での生息状況は、悪石島における極めて波当たりの強い断崖絶壁の潮間帯に生息するという観察が記されている[黒田 1937]。宝島における定性的な観察結果でも、通常の岸側潮間帯でオオツタノハを見ることはなく、宝島でも同様な波当たりの強い岩礁域で採集されたと想定される。そのため、諏訪之瀬島の近現代土坑例と同じく、オオツタノハ採集を主目的として、大形の“アミガサガイ”やオオベッコウガサを同時に採集したと考えられる。オオベッコウガサの有無は、採集地点に、この種が好む平滑な岩礁が存在するかどうかによるものと思われる。

そして、表2のようにオオツタノハの殻頂部が多く、確実な研磨が明瞭な貝輪も出土していることから、貝輪製作が行われていたことも確実である。これまでの事例による限りオオツタノハ貝輪

のサイズは時代や地域で様々に変化するが、およそ7 cm 未満の個体が利用されることは稀である [例えば忍澤・戸谷 2001]。図 1 では、7 cm 未満の個体は 65 % となっている。つまり、半数以上の個体は、食用として採集された可能性も十分に想定される。

2 オオツタノハの常見分布域の変遷

現時点での最古のオオツタノハ貝輪は、縄文時代早期後葉の佐賀県東名遺跡からのものであり、7 点のかなり幅の狭い貝輪片が出土している [例えば西田 2009]。筆者はその供給地として、「トカラ列島等の南島北部圏」を想定した [黒住 2009]。この想定は、同時に東名遺跡から出土したタカラガイの一種、ハナマルユキが現在の温帯域に多い側面が張り出さない型 (ミカドハママルユキ型) ではなく、側面の張り出す亜熱帯から熱帯域に生息するタイプであったことも根拠の一つである。現在の大隅諸島でもオオツタノハの生息は確認されているものの、縄文早期後葉段階では、後述するオオツタノハの常見生息域 (生物学的に記録のある分布域ではなく、ある程度の個体数が生息し、通常観察できる頻度の分布域) の変遷を考慮すると、やはりトカラ列島以南が供給地と想定される。

オオツタノハの現在の確実な分布はトカラ列島までであったが [例えば黒住 1994]、近年の詳細な調査でトカラ列島のわずかに南に位置する奄美大島でも生息が確認された [例えば忍澤 2014]。しかし、奄美大島の例は岬の突端や離れた小岩礁であり、常見分布域とは言えないと思われる。しかし、トカラ列島南端の横当島ではオオツタノハは密度が高く、常見分布域となっている [Kurozumil994; 忍澤 2014]。

この状況は、古代 (貝塚時代後期) においても同様であったようである。オオツタノハ貝輪製作址と考えられ、多数の貝輪が出土している奄美大島北東部の長浜金久第 II 遺跡 [弥栄 1985] では、貝類遺体の詳細は示されず分類別のリストのみではあるがオオツタノハの出土が示されているものの、貝類遺体の図版でもオオツタノハは穿孔の可能性のある個体と貝輪のみが図示され [行田 1985]、未加工個体は示されていない。なお、この貝類遺体の図版には、加工痕があり貝製品とされているマイソデやシマイボボロも含められている。今後、本遺跡の貝類遺体を詳細に再検討すれば、未加工のオオツタノハが確認される可能性も残るものの、稀であることは確実である。このように古代においても、オオツタノハは奄美大島では在地のものではなく、トカラ列島等の他所から搬入されたと想定されよう。

一方、従来確実な分布が知られていなかった沖縄諸島から、名護市屋我地島の大堂原貝塚の縄文早期相当期 (貝塚時代前 1 期) ~ 前中期相当期 (同前 2 期) [岸本ほか 2005] と渡嘉敷島の縄文時代前期相当期 (貝塚時代前 2 期) の船越原遺跡 [黒住ほか 2012, 山崎ほか 2016] から、オオツタノハの未加工個体が報告されてきた。しかし、これらの時代より新しい時代では、多くの遺跡からはオオツタノハ貝輪は出土するものの、確実な未加工の完形個体は報告されていない。

現在の常見分布域との比較で、最終氷期最寒冷期に、現在の大隅諸島以北に分布する貝類が沖縄諸島にまで分布を南下させ、その後内湾を中心に残存していると想定できる貝類はごく僅かな種数である [黒住 2008]。オオツタノハは、このような分布変遷を経た種ではないと考えていたが [黒住 1994]、上記の 2 遺跡の例から、氷期に分布域を南下させた類似した過程を有する種だと判断さ

れよう。現時点では、およそ5000年前まで沖縄諸島に分布していたオオツタノハは、その後、奄美諸島で安定した生息を示さずに、急激に分布域を北へ移動させたと考えられる。

大池遺跡の貝類から推測される6000～5000年前の熱帯的・海域環境

オオツタノハの分布域の北上を記したが、大池遺跡A地点では、前述したようにヤコウガイやチョウセンサザエ等の現在の奄美・沖縄に多い熱帯性の種が優占している。同時期の沖縄諸島では、サンゴ礁は現在のような礁嶺（干瀬）・礁池（イノー）を発達させていないとされるが〔例えば菅2014〕、遺跡は僅かに海面付近にサンゴ礁が形成された地域に遺跡が形成され、貝類採集を行ったと考えている〔例えば黒住2002, 2011〕。しかし、宝島よりも南に位置している沖縄島のおよそ同時期の遺跡では、ヤコウガイが優占し、サンゴ礁域の大型種が大多数を占めるような遺跡は認められていない〔例えば黒住2014〕。6000～5000年前には、遺跡出土貝類の情報から宝島ではサンゴ礁形成で示される熱帯的・海域環境は沖縄諸島よりも急激に発達した可能性も想定できる。

また、奄美大島でヤコウガイが多数出土する遺跡（ヤコウガイ大量出土遺跡）の食用貝類の組成では、リュウキュウヒバリやコウダカカラマツのような岸側潮間帯に高密度で生息する小型種が優占することがわかっている〔用見崎遺跡：黒住1995, マツノト遺跡：黒住2006〕。大池遺跡では、このような小型貝類が極めて多いことはないようであり〔宝島大池遺跡発掘調査班1997〕、同じヤコウガイが多い遺跡でも、貝類利用の様式はかなり異なっていたと考えられる。

まとめ

今回、宝島大池遺跡A地点出土のオオツタノハを中心とした貝類遺体を検討することによって、以下のような事象が確認・推測された。

- ・同定標本数として、381点のオオツタノハを確認した。これは、遺跡出土数としては、最多の数である。
- ・他の“アミガサガイ”等を含めた全カサガイ類の中でオオツタノハは80%を占めており、かなり選択的にオオツタノハを採集していたと考えられた。
- ・出土個体の殻長組成から、5cm以上の個体を目安に採集していた。
- ・オオツタノハ貝輪も出土しており、本遺跡で貝輪製作が行われたと考えられるが、貝輪に利用しない殻長7cm以下の個体も多く、およそ半数以上のオオツタノハは食用を目的に採集されたと想定できる。
- ・ヤコウガイ等のサンゴ礁海域に生息する大型貝類も多く出土しており、6000～5000年前の大池遺跡A地点の貝類からは、沖縄諸島よりも熱帯的であった可能性が示唆された。

謝辞：興味深い大池遺跡のオオツタノハを報告する機会を与えて頂いた木下尚子・藤尾慎一郎両先生と資料整理をして頂きました国立歴史民俗博物館の方々に記してお礼申し上げます。

註

- (1)——トカラ列島のアミガサガイ類は和名・学名とも従来知られていた種とは異なるという研究が進行中であるため、ここでは“ ”を付して、これまでのアミガサガイと区別することとした。
- (2)——貝輪状の穿孔は楕円形を呈するのに対して、1 個体のみほぼ円形で、孔の小さな資料が認められた (TO319)。その形状とサイズから、通常の貝輪製作とは異なる意図による穿孔の可能性が高い。

引用文献

- 忍澤成視 2001:「縄文時代におけるオオツタノハガイ製貝輪の製作地と加工法—伊豆大島下高洞遺跡 D 地区検出資料からの検討—」『日本考古学』第 12 号, pp.21-34
- 忍澤成視・戸谷敦司 2001:「縄文時代におけるオオツタノハガイ製貝輪研究の新視点—東京都八丈町・八丈小島および鹿児島県上屋久町口永良部島採集の現生オオツタノハガイの分析を中心にして—」『動物考古学』第 16 号, pp.27-60
- 忍澤成視 2014:「日本列島先史時代における東西「貝の道」の比較研究・その 2」『高梨学術奨励基金年報 (平成 25 年度研究成果概要報告)』 pp.223-230, 高梨学術奨励基金
- 菅浩伸 2014:「琉球列島のサンゴ礁形成過程」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第 2 集, pp.19-28, 六一書房
- 岸本利江・真栄田義人・宮里牧・新城司・岸本卓己・比嘉久編著 2005:『大堂原貝塚』名護市文化財調査報告書第 17 集, 名護市教育委員会
- 木下尚子・坂本稔・瀧上舞 2020:「鹿児島県宝島大池遺跡 B 地点出土貝塚時代前期人骨等の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 219 集, pp.231-241
- 木下尚子・坂本稔・瀧上舞 2022:「鹿児島県宝島大池遺跡 A 地点の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 237 集, pp.163-171
- 木下尚子 2024:「大池遺跡 A 地点出土の貝製品等」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 248 集, pp.37-58
- 黒住耐二 1994:「オオツタノハの供給地」『南島考古』第 14 号, pp.57-64, 沖縄考古学会
- 黒住耐二 1995:「貝類遺存体」『用見崎遺跡』笠利町文化財調査報告第 20 集, pp.34-43, 笠利町教育委員会
- 黒住耐二 2002:「貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』 pp.67-86, 熊本大学
- 黒住耐二 2006:「貝類遺体からみた遺跡の立地環境と生活」『先史琉球の生業と交易 II—奄美・沖縄の発掘調査から—』 pp.115-134, 285, 熊本大学
- 黒住耐二 2008:「琉球列島の環境変化を貝類から探る」『考古学ジャーナル』No. 577, pp.15-20
- 黒住耐二 2009:「貝類」『東名遺跡 II』第 6 分冊 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 40 集, pp.127-140, 佐賀市教育委員会
- 黒住耐二 2011:「琉球先史時代人とサンゴ礁資源—貝類を中心に—」『先史・原史時代の琉球列島—ヒトと景観—考古学リーダー 19』 pp.87-107, 六一書房
- 黒住耐二・樋泉岳二・赤嶺信哉・盛口満 2012:「沖縄諸島の先史遺跡で初めて確認されたオオツタノハの生息」『動物考古学』第 29 号, p.91, 動物考古学研究会
- 黒住耐二 2014:「貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究, 研究論文集 第 2 集, pp.55-70, 六一書房
- 黒住耐二 2019:「トカラ列島・諏訪之瀬島の近現代のオオツタノハ廃棄土坑から得られた貝類遺体」『中山清美と奄美学—中山清美氏追悼論集—』 pp.469-476, 奄美考古学会
- 黒田徳米 1937:「“野口金蔵”氏の近信」『Venus』第 7 卷第 3 号, pp.159-161
- 宝島大池遺跡発掘調査班 1995:「吐噶喇列島 宝島大池遺跡 特定研究「列島内諸文化の相互交流の研究」1993 年度発掘調査概報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 60 集, pp.261-282
- 宝島大池遺跡発掘調査班 1997:「トカラ列島宝島大池遺跡 特定研究「列島内諸文化の相互交流の研究」1994 年度第 2 次発掘調査概報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 70 集, pp.219-251

-
- 西田 巖編 2009：『東名遺跡Ⅱ—東名遺跡2次・久富二本杉遺跡—』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集，佐賀市教育委員会
- 春成秀爾・設楽博己・竹中正巳 2021：「鹿児島県宝島大池遺跡B・C遺跡の発掘調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集，pp.55-100
- 弥栄久志編 1985：『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書第32集，鹿児島県教育委員会
- 山崎真治・黒住耐二・國木田大 2016：「渡嘉敷村船越原採集のオオツタノハ遺体の産状と年代について」『慶良間列島の遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第81集，pp.103-106，沖縄県立埋蔵文化財センター
- 行田義三 1985：「長浜金久遺跡出土貝類について」『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書第32集，pp.233-242，鹿児島県教育委員会
- Kurozumi, T., 1994: Invertebrate faunas, mainly land molluscs, of Tokara Islands, northern Ryukyus. WWF Japan Science Report 2 (2), pp. 339-387

(千葉県立中央博物館)
(2023年3月31日受付，2023年7月25日審査終了)